周密と道學

石田　肇

一

南宋史を考える時、道學が隆盛し朱子學が官學化したことの意味は大きい。(1) 朱子學の位置をどう理解するかということに關しては様々な議論があるにせよ、(2) 一般に朱子學は南宋という時代を代表する思想體系として理解されよう。しかし、南宋にあっては北宋以來の程學と王學の對立、あるいはこれにからむ蘇學、そして陸學や經世諸學派といった様々な思想潮流があり、對金關係という時代背景のなかから複雜な政治狀況が生みだされた。このような狀況下にあって、朱子學が官學化してゆく過程で常に反道學の勢力があり、何回かの道學への彈壓がなされたのであった。從來、道學の側に立った研究は多いが、これらを批判する勢力についての研究は少ないようで、朱子學を南宋史に相對化し定位せしめるためには道學を批判する勢力についての視角と分析も必要である。そこで小稿では、南宋の道學について多くの批判的な記述を殘した周密なる人物とその記述について考察してゆくことにしたい。

宋の南渡後の政治過程における道學については『宋元學案』（以下、『學案』と略稱する）卷九六の「元祐黨案」、そして同卷九七の「慶元黨案」に要約表化されており、前者は建炎元年（一一二七）から紹興二十八年（一一五八）までを、後者は紹興二十九年から嘉定十七年（一二二四）まで、そして寶慶元年から德祐二年（一二七七）までを通覽していて簡便であるが、以下、簡單に流れをみてゆく。南渡後、活潑化しつつあった道學に對して、紹興六年から道學批判が始まり、翌年

にその頂點を迎え、その後の小康狀態をへて、紹興十四年の專門の學の禁に到り、この狀態は紹興二十六年まで續くことになる。この時期は秦檜の專政と對金和親策に對する主戰派ならびに道學者の對立という關係であり、北宋以來の王學對程學という對立關係も存在した。(3) 秦檜が紹興二十五年に沒すると道學への批判も弱まり、道學が再び擡頭してくることになる。『學案』卷九六は「攻專門之學者」として秦檜や陳公輔らとともに周秘なる人物をあげるが、周秘は小稿の主題とする周密の曾祖父であり、彼は紹興六・七年代の道學批判側の人物であった。

その後、道學の勢力も復活し、朱熹をはじめとして活潑な活動をみせるが、慶元四年（一一八八）の慶元僞學の禁に到って道學は僞學とされる。この僞學の禁の前哨戰とでもいえるのが淳熙九年（一一八二）の朱熹による唐仲友の彈劾事件であり、ついで翌年には陳賈が僞學の禁を請い、紹熙の內禪によって韓侂胄が權力を握ると僞學の禁に到るわけである。嘉泰二年（一二〇二）には僞學の禁も緩み、開禧用兵の結果、韓侂胄が誅せられると道學徒の復權はすすみ、端平年閒のいわゆる端平の更化にあっては朱子學徒の眞德秀や魏了翁が要職についたのであった。朱子學が官學とされた時期をいつとするかは官學の定義にもよるが、小稿では一應、淳祐元年（一二四一）、王安石が孔子廟の從祀から黜けられ、これに代って朱熹らが從祀され、また「道統十三贊」が製せられて國子監に賜ったことをもって官學化されたと理解することにしたい。(4) 右のように慶元僞學の禁の後、朱子學は順調に復權したかにみえるが、周密はこれに對して批判的な記述を殘しており、そのため彼は『學案』卷九七に「晩宋詆詈諸儒者」として唯一人あげられているのである。

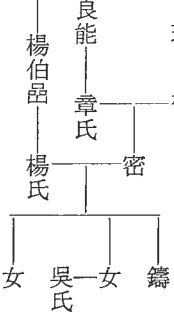
二

周密（一二三二～九八）、字は公謹、草窗・蘋洲・弁陽老人・四水潛夫などの號をもち、宋末元初の人物である。彼は詞人、南宋の遺老あるいは遺民、(5) 鄭思肖とならぶ亡宋の忠臣、(6) 抗節遯迹の人、(7) といった樣々なイメージを與えるが、遺民詞人というイメージが一般的であろう。一方、彼は『齊東野語』（以下、『野語』）、『癸辛雜識』（以下、『雜識』）、『武林舊事』

（以下、『舊事』）、『浩然齋雅談』（以下、『雅談』）、『志雅堂雜鈔』（以下、『雜鈔』）などの著作を殘しており、これらに描かれた南宋史の様々な斷面は『宋史』や『建炎以來繫年要錄』（以下、『要錄』）などの編纂史料とは一味異った南宋の狀況を傳えており、南宋史を理解する好材料を提供しているといえよう。尙、小稿での周密の著作からの引用はかなりの節略かつ意譯にすることをお斷りしておきたい。(8)

周密については夏承燾の「周草窗年譜」（同『唐宋詞人年譜』所收、以下「年譜」）が詳しく、(9) 諸史料を博搜しているのだが、あくまでも詞人としての周密に焦點があてられている。一方、周密の著作を史料として有效に利用している論文も多く、周密の著作の重要性が諾われよう。(10) 本節ではまず周密の家系、ついで彼の傳、その藏書、そして記錄精神といったことの概略を、小稿の主題と關連して記しておくことにする。(11)

周密の祖先は濟南の歷城の人で、家系圖を示すと次の如くになる。



周芳から周位までの三代は北宋の人で、彼等の事績について詳しいことはわからないのだが、芳は熙寧年閒に孝廉をもって徵されたがつかず、光祿少卿を賜ったとされ、孝恭(12)は吏部郎中をへて知同州となり、殿中監を贈られ、位は大中大夫を贈られたとされる。周秘（？～一一四七？）は高宗に從って南渡し、湖州の鐵觀音寺に住んだという。彼については後節でふれるところであり、紹興五年から七年まで御史に任ぜられ、道學批判の論陣をはったことを記すに止める。周珌については淳熙から開禧にかけての事績が知られ、彼の代に湖州の天聖寺に移り、彼は刑部郎中（『宋會要輯稿』、以下『會要』、選

學・選試、慶元年十月二十五日條)、大理卿(同、選試、慶元三年二月二十五日條)などをへ、湖北提點刑獄使の後、慶元六年に浙東提點刑獄使となっている(『會稽續志』巻二)。慶元年間の僞學の禁の時代にあって法官系の役職を歴任したことになるが、僞學の禁との關係は未詳である。一時、黜降されて祠祿を得たが(『會要』、職官・黜降、嘉泰元年正月十七日條)、その後、刑部侍郎をへて(同、兵・捕賊、嘉泰四年五月十二日條)、開禧元年に知會稽府となり(『會稽續志』巻二)、翌年に祠祿を得(同前)、この後、二十年近く門を閉じ、毛髪すら官府に到らなかったいわれる。(13)

周密の父の晉は秘・珌に比べると顯官にはならず、地方官に終始したようである。紹定四年に富春令となり、この折、慈明太后が崩じたが、葬儀の費用を民に科さずに自辦したために周佛子といわれるほどであったのだから、周家がかなりの資産家であったことがわかる。翌年、任地で周密が生まれる。周密は以後、父の任にともなって建寧府・衢州府などの各地をまわる。寶祐三年、晉は鄞江(汀州府武平縣)に任じたが、後の消息については未詳である。景定四年、宜興で公田法を監督していた周密は母の病氣のために歸養したというのだから、あるいはこの頃には沒していたかもしれない。尙、後述の如く、晉は良田を賣ってまでも購書の費用としたといわれる。

右のように南宋の各時代に代々官僚であった家系に周密は生まれた。彼は二十歳の頃、太學に在學したと推測されるが、二十二、三歳の頃、吏部銓の第十三人であり、その後、周珌の蔭で建康府都錢庫に調され、ついで臨安府の和劑惠民藥局にあって奉禮郎兼太祝に充てられたという。景定二年、三十歳の折には臨安府の帥幕であり、前述の如く、景定四年には宜興で公田を監督したのだが、賈似道の意に忤って浮額の十分の三を除いたため、いつ叱責されるかもわからず、母親の病氣を理由に任を離れたのであった。咸淳元年の頃には兩浙轉運司の屬官であり、吏才があったといわれ、同十年には臨安の豐儲倉のおそらくは檢察であった。景炎元年の頃、金華の義烏令となっているが、この年、臨安は元軍の支配下となり、湖州の弁陽にあった周密の家も既に兵火を被り、その厖大な藏書の多くを失ったと推測され、周密は官を棄てている。翌年、彼は杭州に住むことになるが、妻の楊氏の緣で楊和王府のあった癸辛街に住み、ついで至元十九年、杭州の

大火のために楊家の別荘のあったより西側の西湖岸に近いところに移り、以後、終身、この地に住み、市井にあって著作の執筆、書畫の鑑賞、詞人として多方面に活躍したのであった。沒年は『保母志』の跋文よりして大德二年といえよう。(14)

周密を考える時、彼の親戚關係も重要な意味をもつ。まず彼の母である章氏は章良能（?～一二一四）の娘であり、良能は著作佐郎、樞密院編修官、起居舍人、禮部侍郎、御史中丞などを歷任し、後に參知政事になった人物で、湖州に寓居していた。後述の如く、良能の日錄が周家にあったことが知られる。周密の妻は楊氏であり、その父の楊伯嵒（?～一二五四）は知衢州になった人物で、周密十五歲の折、彼は衢州の太末におり、この時の知州が伯嵒であった。兩家の關係はこのような緣にもよっている。楊伯嵒は楊存中（沂中、一一〇二～六六）の曾孫にあたり、周密が兵火の後に杭州に住んだのも楊氏との關係によっている。楊存中は後に和王に追封された人物であるが、南宋初期の武人として知られ、張俊の腹心であり（『宋史』卷三六九、張俊傳）、秦檜・張俊とともに對金和親派の一人であった。

周密の家に多くの藏書があったことは『野語』卷一二の「書籍之厄」に詳しく、これによると周秘以來三代にわたる藏書があり、特に父の晉は良田を賣ってまでも購書の費用とし、その結果、四萬二千餘卷の書籍と三代以來の金石の拓本千五百餘種があり、これらを書種・志雅の二堂に置き、晉は校讐の日々をすごして利殖には眼をむけなかったことが知られる。しかし、周密は若い時より多くの難儀にあってそれら善書を悉く失ってしまい、來し方を考えると斯文のために感慨を催し、流涕してしまう。そこでこの誤りを記して子孫に示すのだ、という。(15) おそらく藏書の多くを失ったのは前述の如く景炎元年のことであろう。(16) また『野語』の自序によると、周秘・珌そして章良能は史實を知る立場にあり、朝野の故實や見聞が歲ごとに日紀に編纂されていて信ずべきこと、(17) 周晉は群書を博く極めて臺閣の舊事に通じており、客と對するごとに音吐朗々と說明し、故家の文獻とされていたことをいう。次に、ある事件が世俗の說明と異り、また國史の論も異っているので、周密が後に父に質問すると、父は秘・珌の手澤した數十の大帙を示し、その事はこうである、と答え、また章良能の日錄や諸老の雜書を示し、御先祖樣の記錄したことと同じだ、世俗の說明が異っているのは誤りで、國史の論が

異っているのも私意である、と言ったという。また、愛憎もひとたび衰えれば論議はおのずから公平なものとなり、國史は何回も書きなおされ、是か非かもかわってしまうが、我家の家乘は訂正すべきではないことを理解しなさい、と言われたとある。ところが、これら書籍は散亡してしまったので、年老いてますます悔まれ、多くの事件のなかのいくつかを思い出し、史傳や諸書と比較し、近聞の諸說をも勘案して事實の記述に務めて『野語』にまとめたのだ、という。

以上の記述からすると、周密の家には周家のみならず章良能の記錄まであり、南宋の各時代についての史料の蓄積を踏まえて家學としての史實を傳え、周晉が周密に示したように、國史や世俗の論とは異る解釋をする場合もあったことが理解されよう。それゆえ周密は自己の著作が國史や世俗の論と異ることを自覺しており、家學によって史實を『野語』や『雜識』に記したことになるわけである。藏書の多くを失い、亡宋の悲哀を經驗した周密にとって、市井の人となってからは故國の遺老という立場にあり、嘗ての日々を追憶し、それらを著述したのは當然の營爲であったといえよう。周密は體系的に南宋の時代を記述しようとしたわけではなく、それらは書名通りに野語であり、雜識であり、雅談であり、舊事であった。それぞれの內容も幅廣く、あらゆる分野を雜載することになり、それらは家學をふまえた周密の旺盛な記錄精神と亡宋への追憶の產物と稱しえよう。

これら著作をみてゆくと、明らかに周密の文章ではなく珌や晉の文章と推測しうるもの[18]、あるいは晉が章良能から聞いたもの[19]、周家に傳わる史料によるもの[20]、周密が直接聞いたもの[21]、周密が調べたもの[22]、他の書物から引用したものなどがある[23]。彼は詞作と書畫古器物の鑑賞とともに、諸公との交りから見聞を廣め、失った書物を買い整え、あるいは諸家の藏書を借りて、自らの記憶と殘った藏書をもとに著述に勵んだことになる[24]。このようにして成立した周密の著作には、當然のことながら宋元兩朝に仕えたいわば貳臣への批判の言辭[25]、亡宋の折の忠臣への讚辭がみられるし[26]、史書の闕を補う記述があったり[27]、今日からすれば獨自の史料も存在することになる[28]。また故都臨安への追憶は『舊事』に結實したのであるし、先述の『野語』自序にもあるように、從來の國史との記述の違いがでてくることにもなる[29]。小稿の課題とする道學についての

批判的な記述も一般の記述とは様相を異にしてはいるが、それは周密なりに用意のあってのことといえるわけである。

三

周密が殘した道學に關する批判的な記述のいくつかは南宋の道學を論じた論文でふれられることがあるが、[30] このような記述は朱子學が官學になると當然のことながら問題とされ、周密への評價も嚴しいものにならざるをえなかったと推測されよう。

『野語』は元代に出版された後、[31] 明代に胡文璧が再び出版するのだが、[32] 正德十年（一五一五）の胡文璧の『野語』の後序には、客が『野語』をみて、この書の內容は論も明らかで博識であり甚だ良いのだが、苻離・富平などの役の記述では張栻の父である張浚に詳しく及んでいるし、唐仲友と陳亮の仲違いや胡寅の生母への服喪のことは朱熹と胡寅にとって嫌忌である。これらの部分は必ずしも刻することはないので、出版の折には削去したらどうだろうか、と言ったので私は憮然としてしまった、とある。ここにあげられた諸問題は後述するところであるが、朱子學が既に官學として確立されていた明代にあっては、これらの記述は隱蔽されるべきものであり、『野語』は朱子學の側からすれば、危險な書物であったことになる。

既述の如く、『學案』卷九七では「晚宋詆詈諸儒者」として周密一名のみがあげられているが、同書の周密への王梓材の案語では、『野語』卷一一の「道學」の內容はその前半と後半とでは評價の仕方が矛盾しているとし、また『雜識』續集上の「羅椅」などや『雅談』卷上の記述をあげて、やはり「道學」の前半とは矛盾しているとしている。「道學」の前半は次のように記す。伊洛の學が世に行なわれて乾道・淳熙年閒に盛んとなったが、先賢の旨意をよく發明し、徂源に遡り、論著講解が卓然として一家たる者は張栻・呂祖謙・朱熹のみで、なかでも朱熹が最も勝れており、全てを義理で說明しえた。孔孟の道は伊洛をへてこれら諸公に至ってはじめて餘すところなく、このような人々をこそ道學というのであ

る。この外、張九成と陸九淵は佛教に關係して異端に流れ、永嘉の諸公は詞章議論にすぐれていて同日に語るべきではない、と。王梓材は以上の説明は平允な論とするのであるが、「道學」の後半では、淺陋な人々がおり、自らは進取の地のないことを知って道學の名に附し、褒衣博帶、危坐闊步し、語錄を抄節して高談の資としたり、閉眉合眼して默識と號したりしている。しかしその學ぶところを問い詰めると古今に聞知するところがなく、その行いを調べれば義理において分別するところがない。これは聖門の大罪人で吾が道の不幸であり、小人に僞學という名目の口實を與え、君子は玉石俱焚の禍いを受けてしまう、として周密は淺陋な道學者らを批判している。この記述について王梓材は詆詈の語であって、「道學」の前半と矛盾するというのである。

後述する如く、確かに周密の他の道學批判の記述は「道學」の後半に相當するものが多く、王梓材の立場からすれば矛盾することになる。しかし周密の眼からすれば南宋の道學者は朱熹らを除けば甚だ淺陋な存在に見えたようである。このような周密の道學への批判的な記述はその後も問題とされ、[33] 陸心源（一八三四～九四）は『儀顧堂續跋』卷一一の「書癸辛雜識後」において、周秘が道學批判に加擔したことを記したうえで、周密が道學を詆詈したのは家學であるとしており、[34] この點については次節で記すことにする。また陸心源は、怪しむべきことに道學の諸公に遲れること千年近くして、紀昀（一七二四～一八〇五）が周密の唾餘を拾って道學批判の口實としたのは何故か。[35] 周密は賈似道の客で、[36] 紀昀は和珅（？～一七九九）に依拠したのだから似た者同志なのだろう、としている。周密と賈似道を、そして紀昀と和珅を結びつけて理解しようとしているのである。

近人の陳東原は『國史舊聞』第貳分册の第四三八條「周密論道學」において、[37]『雜識』續集下の「道學」や前記『野語』の「道學」をはじめとするいくつかの周密の道學批判の文章を示したうえで、黃宗羲（一六一〇～九五）と顏元（一六三五～一七〇四）の道學批判の文章をあげ、道學の批判は宋末に一時的にみられることではなく、道學の禍は後世にも及んでいる、としている。

右の如く、周密の道學批判は道學の立場からすれば、ましてや官學という立場からすれば隱蔽されるべきこと、あるいは反批判すべきことなのであるが、一方で陸心源や陳東原が指摘しているように、後世にも道學批判の動きがあったわけである。朱子學が官學となって以後、道學批判は封ぜられてきたわけであるし、官學になって以後の道學研究の多くはあくまでも道學の側に立ってのものであった。このようにみると、『宋史』をはじめとして道學に好意的に編纂された史書が多いなかで、周密の殘した道學批判の記述は、その評價はともあれ異彩を放っているということになり、注目に値するのである。次節では周秘のこと、ならびに南宋初期についての周密の評價をみてゆくことにしたい。

四

周秘は高宗に從って南渡した後、明州象山縣令（『會要』兵・捕賊下、建炎四年四月三日條）、知衢州（康熙『衢州志』卷一二）をへて中央にもどり、紹興五年から七年まで御史の職にあり、御史中丞に到っている。その後、知秀州（『要錄』卷一一五、紹興七年十月辛丑條）、知紹興府（『會要』職官・制置使、紹興九年正月十三日條）をへて、紹興十年に祠祿を奉じ（嘉泰『會稽志』卷二）、同十七年頃に徽猷閣直學士提舉江州太平興國宮をもって沒している。[38] 周秘に文集などはなく、彼の思想的背景などは未詳であるが、御史の職分として樣々な發言をしており、小稿で問題となるのは道學批判と張浚への批判である。

紹興六年、左司諫の陳公輔は程氏の學を屏絕することを乞うたところ、士大夫の學は孔孟を師とし、言行があい稱い、時用に役立つようにという詔が下り（『要錄』卷一〇七、紹興六年十二月己未條）、崇寧以來禁止され、靖康に復活し、南渡以來、活潑になった程學は再び禁止されるようになってしまった。翌年正月、この旨を黃次山が鏤版しようとしたところ、董弅がこれを止めたため、御史臺はこの行爲を詔令を沮格するものとし、周秘は董弅を彈劾し、董弅は知衢州になったのであった（同前卷一〇八、紹興七年正月辛未條）。程學の禁止を建康で聞いた呂祉が道學者の李處廉を批判し、また石公揆も李處廉の罪を言うなど（同前卷一〇八、正月乙酉條）、この時期、道學批判が續く。一方、胡安國が邵雍・張載・二程を孔子廟

に從祀せよと乞うたところ（同前、正月癸酉條。『道命錄』卷三、「胡文定公乞封爵邵張二程先生列於從祀」）、陳公輔・周秘・石公揆は胡安國を彈劾し、胡安國は提舉太平觀となったのであった（『宋史』卷四三五、胡安國傳）。

ところで紹興七年は、正月に秦檜が樞密使となり、張浚から秦檜へと權力が移ってゆく時期でもあった。このような折、周秘は張浚批判の立場にあり、八月には張浚は無能であるとしたことを皮切りに（『要錄』卷一一三、八月乙卯條）、九月には張浚批判の二十事を言い（同前卷一一四、九月乙丑條）、このため張浚の兄の張滉は祠祿を得ることになり（同前卷一一四、九月丁卯條）、張浚も提舉江州太平觀になってしまう（同前卷一一四、九月壬申條）。このような張浚批判に對して趙鼎の反批判もおこなわれたが（同前卷一一四、九月壬申條）、周秘は張浚批判を續け（同前卷一一四、九月甲戌條）、十月になってもその批判は續いた（同前卷一一五、十月壬辰・戊戌條）。結局、張浚は嶺表に安置されることになったが、趙鼎が張浚の母親が老いていることを言った結果、張浚は永州居住ということになる（同前卷一一五、十月戊戌條）。そしてこの十月、周秘は自ら外任を乞うて知秀州となり、中央を離れてしまうのであった（同前卷一一五、十月辛丑條）。

右の如く、御史であった周秘は紹興六・七年にあって、當時の政界の二つの流れ、つまり道學の復興を否定する流れ、そして張浚から秦檜へと權力が移る流れの兩者に關係したことになる。この二つの流れは對金政策という視點からしてみれば表裏する動きであり、和親派の秦檜と主戰派の張浚および主戰派に與する道學者の對立という圖式になり、周秘は和親派であるということになる。周密はこのような曾祖父秘の行動については熟知していたはずであるし、既述の如く妻の楊氏の高祖にあたる楊存中は秦檜に與した張俊の腹心であり、周密は楊和王府のあった癸辛街に住んだのであった。では周密は南宋初期についてどのように記しているのか次に見てゆくことにしたい。

『野語』卷三の「誅韓本末」は韓侂胄が誅されたことについての記述であり、周密の韓侂胄評價を示す文章であるが、次のようにある。紹興の時代、秦檜は和を唱えて王倫を出使したところ、胡銓が抗疏して秦檜を斬って天下に謝ることを請い、時人はみな胡銓を讚えた。[39] 一方、開禧の時代には韓侂胄は戰を唱え、王倫の子の柟が出使し、結局、韓侂胄の首を

送って和を請うた。これでは和を唱える者は斬るべきで、戰を唱える者も死を免れない。一方は是で一方は非であり、いったいどういうことなのだ、とある。周密は紹興と開禧での對金政策の一貫性のなさを指摘するわけである。周密の考えでは、高宗は當時の南宋の領域の地勢・財力・人物を察知して金と爭うべきではないとし、休養して戰備の整ったところで對金戰爭をすべく考えていたのであり、秦檜は高宗の意を推察して和親を主としたのであるが、一時の功名の士が和親派に罪を歸したのだ、とする。この一時の功名の士とは主戰派ならびに道學者をさすことになるわけである。ついで周密は、韓侂胄は高宗や秦檜の考えを熟知していたゆえ、金が弱體であるのを知り、華北を回復して功名をたてようとしたのだが、時代はかわって人情は平和に慣れきっていることを知らず、一旦、騷動がおきると怨嗟の聲が起きてしまった。寧宗は守成の君で回復の意志はなく、情にまかせて妄りに動き韓侂胄を殺してしまったのは尤もなことだ。韓侂胄の死後、全ての惡は彼に歸したが、この閒の是非については議論し盡されてはいない、と記したのであった。周密はまた『野語』卷一二の「淳紹歲幣」では、開邊の費用も莫大だが、和戎の費用もまた容易なことではない、と記し、和戰どちらにしても大變な經濟的負擔であるという認識を示している。

右のように對金關係を見ていた周密にしてみれば、南宋初期の主戰派への評價が嚴しくなるのは當然のことである。彼は張栻の父の張浚に關して『野語』卷二の「張魏公三戰本末略」で「富平之戰」「淮西之變」「符離之師」の三者を詳述している。紹興七年の淮西の變に關連して張浚が提擧太平觀になったことを記すものの、周秘が張浚批判をおこなったことには言及していず、この「張魏公三戰本末略」には周密の評價の文章はなく、いくつかの筆記を引用しており、周密の評價の代辯をさせているといえよう。それらのうちから『何氏備史』と『澗上閒談』(40)からの引用をみてみよう。

『何氏備史』には、張浚とその子の張栻は道學の宗主であり、浚が臨安にいる時は配下を門人で固めて君子と詭り、その非を指摘する者がいると小人と目した、とある。また同書は隆興初年の符離の師について、實錄や時政記が全くこれにふれていず、公論はどこにあるのか、としたうえで、張浚が死ななければ金との和議は成らず、そうであればこの禍はま

ことにひどかったであろう、とする。これは張浚への批判であり、かつ張栻への批判でもあるのだから、主戦派ならびに道學派への批判であり、周密の考えも同様のことと理解されよう。『澗上閒談』には次のようにある。近世の修史は實錄・時政記などに基づき、かつ諸家の傳記や野史・墓誌銘・行狀の類を參考としている。野史には私情が交っていて固より盡くは信じ難いが、墓誌銘や行狀は全く子孫や門人の譽め言葉であるのだから、やはり盡くは信ずべきではない。だから後者の虚言よりも野史や傳記の信ずべきもののほうが良い、と。これは周密の『野語』や『雜識』が墓誌銘や行狀よりも信がおけるというのにも等しいことである。ましてや周家には獨自の記錄があったのだから、彼は自らの著作になみなみならぬ自信を持っていたといえるわけである。

周秘が胡安國を彈劾したことは既に記したが、周密は『野語』卷六の「胡明仲本末」で、胡安國の子の胡寅を名儒とはするものの、胡文璧の『野語』後序で問題とされているように、胡寅は貴顯の人物になると、その生母の喪に服さなかったため章夏に彈劾され、秦檜にも惡まれて新州に謫されたことを記している。(41) 胡文璧によれば、この事實は道學側にすれば嫌忌であったが、周密は記したのであった。また一般には胡寅は安國の弟の子とされるが（『宋史』卷四三五、胡寅傳）、周密は庶子としており、周密には含むところがあったといえよう。

以上、南宋初期の問題をみてきたが、次節では朱熹の唐仲友彈劾事件以後の問題についてみてゆくことにする。

五

紹興二十六年、專門の學の禁が解けると、その後、道學は再び活潑になり、慶元僞學の禁に到って再び彈壓されることになる。この僞學の禁の前哨戰とでもいうべき事件が淳熙九年の朱熹による唐仲友の彈劾事件であった。(42) 周密は『野語』卷一七の「朱唐交奏本末」で、宰相の王淮がこの事件は秀才が閒氣を爭っただけのことだ、と上奏したことを紹介し、ついで、朱熹の門人達の年譜や道統錄では王淮が唐仲友に與したとして排斥するのは公論ではない、としている。またこの

事件の發端となった天台の營妓嚴蘂については『野語』巻二〇の「台妓嚴蘂」で述べており、朱熹の執拗な取調べにも嚴蘂は挫けずに唐仲友を庇ったことなどを傳えている。周密はこの記述を天台の舊家で調べたことによると記しているゆえ、彼がこの事件にかなりの關心をもっていたことを示しており、周密は唐仲友の側に好意的であったわけである。

慶元僞學の禁に到る過程については『野語』巻三の「紹熙內禪」に詳述されている。すなわち、寧宗擁立の功があったにもかかわらず、韓侂胄は一階級昇進して觀察使樞密都承旨に進んだにすぎず、ために宰相の趙汝愚を恨み、汝愚を追い出す謀りごとを始めたところ、汝愚も對抗して朱熹を長沙から召して待制として經筵に侍らしめ、李祥・楊簡・呂祖儉らも召して自ら壯とした。しかし、宮中での議論では寧宗擁立の功績は韓侂胄のものとされており、侂胄は宮中に出入りして、宮中にあっては權力を握り、伶人に朱熹らの木像を作らせ、冠や袖を着飾って性理を講說させるという戯れをする有樣であった、と周密は記す。その後、兩者の對立は強まって僞學の禁に到り、韓侂胄は十年の專政をして對金戰爭をはじめ、身を殞い國も危機に瀕してしまった。侂胄は固より責めるに足りないが、當時の諸君子は侂胄を制馭するのに道を失ってしまい、このような狀態になってしまったのだ、としている。そして前述の如く、侂胄の末路を『野語』巻三の「誅韓本末」に記したのであった。(43)

ところで「誅韓本末」や『野語』巻一一の「道學」、そして同じく巻一一の「鄧友龍開邊」によると、開禧用兵の發端は嘉泰四年九月に鄧友龍が金へ賀正旦使として派遣された折、(44)金がモンゴルに脅かされて疲弊した狀態であることを知り、これを奇貨として韓侂胄に告げ、用兵をそそのかしたからで、用兵の發端は鄧友龍にあるとする。(45)周密によると鄧友龍は張栻に學んだ人物であるが、(46)道學が僞學とされるとこのことを隱して昇進し、韓侂胄に阿った人物である。周密の外曾父の章良能が鄧友龍と同宿した折に、鄧友龍がもとは道學の徒であることをからかったところ、これを根にもった鄧友龍は後に章良能が宗正少卿になるのを妨げた、という。(47)周密は開禧用兵の發端に道學の徒が關係していたことを指摘したのであった。前節で述べた周密の對金關係の認識からすれば、鄧友龍への批判は當然であるが、章良能の人事も絡んでい

るのである。

嘉泰二年に僞學の禁は緩められていたが、寧宗の次の理宗の時代になると道學は勢力を回復し、理宗が親政するといわゆる端平の更化となり、道學は隆盛し官學という地位を得たのであった。ではこのような時代を周密はどう記しているのであろうか。『雜識』前集の「眞西山入朝詩」によると、眞德秀は元祐の時の司馬光のように期待されて入朝したものの、まず道學を尊んで正心誠意を第一義とすることを言い、ついで『大學衍義』を進めるだけで實際の政策にはなんの見るべきものはなく、物價高もおさまらず、一年で沒してしまったことを記す。(48) 一方、『野語』卷一二の「三教圖贊」では、馬遠が宮中で描いた三教圖に江萬里が贊を書いたところ、釋氏が趺坐し、老聃は傍睨するが、惟だ吾が夫子は絶倒して地に在る、とあって嬉ばれたという。つまり宮中にあっては佛・道・儒の順に尊ばれており、儒學の評價が低かったということになる。このような記述を殘す周密のことであるから、理宗の廟號が理學によっていることについても、『野語』卷一六の「理度議謚」では、理宗の在位は四十一年閒であったゆえ、理とは四十一年王者の象にすぎないと理字を分析してみせる。端平の更化、そして朱子學が官學になったとされる理宗の時代について、周密は右のような揶揄的な記述を殘したのであった。

このように周密は道學について批判的な記述を殘したのであったが、その極めつけは宋の滅亡と道學を結びつけた記述である。『雜識』續集下の「道學」と『雜鈔』卷七の一文はともに吳興の老儒沈仲固（子個）(49)の言を引用しており、重複した部分が大半であるが、『雜識』によって沈仲固の言を示すと次のようにある。道學の徒は道學の名を假りて世を欺く眞に噓枯吹生の連中で、財賦を治めれば聚斂、扞邊を開闢すれば龕材、讀書作文は玩物喪志、心を政事に留めれば俗吏だとし、彼等の讀むものといえば四書・近思錄・通書・大極圖・東西銘・語錄の類にすぎず、その學問は正心・修身・齊家・治國・平天下だと詭り、これこそ生民のために極を立て、天地のために心を立て、萬世のために太平を開き、前聖のために絶學を繼ぐものだとしている。地方官になれば書院や諸賢の祠をつくり、四書の註釋を刊行したり語錄を編纂し、

賢者と號して名聲をえて厚祿をはみ、科擧では四書や語錄で答案を書けば合格させて名士とする。そうでなければ身を立てることが司馬光のようで、文章氣節が蘇軾のようでも本領ではないとしてしまう。だから天下の士は道學に競趨し、批判する者があれば小人とし、皇帝でもどうにもならず、その氣燄はこのように恐しい。彼等の行動は言行不一致で人情からかけ離れており、いずれ必ず國家の大きな禍となり、西晉の清談よりひどいであろう、と。沈仲固は彼の眼からみた當時の道學者らの實態をこのように言ったわけである。

周密は右の沈仲固の言を幼少の折に聞いてさほどのこととは思わなかったが、淳祐の頃からの狀況を見ると沈仲固の言の通りであり、賈似道が權力を握るや專ら彼等を用いて道學を尊崇するとしたが、實は彼等が不才で賈似道を掣肘しないのを幸いとしただけで、結局、萬事うまくゆかず、身も國も亡ぼしてしまった。不幸にして沈仲固の言があたってしまいまことに悲しいことだ、とする。淳祐の頃、つまり朱子學が官學となって以降のことを記し、賈似道をとりまく道學者らが無能で、宋の滅亡に關係するとしたわけである。賈似道が宰相になると三學の學生達を籠絡したことは『雜識』後集の「三學之橫」にみえ、これに續く「賈相制外戚北司戢學校」では、賈似道が外戚・宦官・學生をうまく抑制したことを記すが、彼は道學を崇尙して科擧で學生を選別することに託けて、專ら出來の惡い連中を用い、理學を談じる者、時文がうまいと誇る者もいたが、彼等は兵財政刑のなんたるかを知らず、汚い格好をして低能で救いようがなかった、とも記しているのである。

右のような南宋末の道學者に對する批判的記述のひとつとして『雜識』續集上の「羅椅」をあげることができる。ここでは具體的な個人をあげて批判しており、黃榦の門人と詭っていた饒魯[50]の弟子である羅椅・董敬菴・韓秋巖の奇怪な處世について記している。羅椅は出身を隱して賈似道に仕えたのだが、その不情ゆえに嫌われ、賈似道を去って揚州の趙日起のもとで貧乏儒者ぶりを發揮していたところ、そこで賈似道と再會し、賈似道が趙に羅椅は賈の富に十倍するほどの家の出であるといわれて趙のもとを離れ、以後、彼は下級官僚として過ごした、という。この記述についての羅椅側の批判も

あるのだが、[51] 周密からすると財産家であることを隠して貧乏儒者面をする道學者ぶった羅椅は奇怪に思えたのである。一方の董敬菴と韓秋巖はともに結婚せず、饒魯の沒後、その木主を背負って匍匐往哭し、宿では木主を祭って泣くので嫌がられ、撫州を通った折に知州であった黄震がこれを知り、郡廳に位牌をおき三人で先師を偲んで泣いたという。二人は饒魯の石洞書院からもどると黄震の世話になったのであった。周密はこの二人を指して、一時の道學の怪なることは往々此に至った、としている。

以上、周密の描いた南宋の道學をみてきたが、南宋を通じて周密は一貫して道學の缺點を示す記述を殘して道學を批判しており、それらは陸心源がいうように周秘以來の家學の產物と評してよいであろう。これら批判に共通するのは現實の政治に無能であった道學者あるいは似非道學者への批判であり、對金政策に關していえば現實をふまえない道學者への批判であった。このような周密の批判は次の記述からもうかがうことができる。『雜識』別集下の「空談實效」は周平原なる人物の言を引いており、それは、今の學者はただ議論での理解は大變深いのだが、意を實行に加えていない、というものである。また同樣のことは『雜識』後集の「雅流自居」にみえ、周密は劉克莊の、義理の學が興って以來、士大夫の研深尋微の功は先儒に愧じないが、これを政事におこなうとうまくゆくことは少い。理は精でも事は粗で、理をよくする者は事をよくしないのは何故か。これは大部分の士大夫が雅流で自居し、俗事を潔いとしないからである、[52] という言を引き、これは近世の士大夫の缺點をよく言いあてているとしている。既にふれた沈仲固も當時の士大夫の行動は西晉の清談よりもひどいとしていたが、このように南宋の士大夫の議論を清談と比較する見方は南宋初期より散見できる。[53] 周密は『雜識』續集上の「開慶六士」では、淳祐四年、史嵩之が起復する折に上書して反對した陳宜中・黄鏞・曾唯ら六人の開慶六君子の[54]内、黄・曾らは宋が滅んだ後に元に降ったことを記したうえで、某人の次の言をひく。それは、開慶の六君子は至元になると三度叩頭した。[55] 宋が亡んだのはこの連中のためで、この禍は西晉の清談よりひどい、というものである。開慶の六君子についての具體的な史實の理解については未詳な部分もあるのだが、ともあれ宋の滅亡という事實を宋末の

士人達に結びつけて理解し、彼等を清談にあけくれた西晉の士人よりもひどいとするわけである。

六

前節までは周密からみた道學者のいわば政治面の評價についてみてきた。周密は詩集に『草窗韻語』を、詞集に『草窗詞』や『蘋洲漁笛譜』を、そして彼が編纂した『絶妙好詞選』を殘しており、彼は宋末元初を代表する詞人として著名であり、本節ではこのような詞人周密からみた道學の評價、つまりは道學と文學の關係についてみておくことにする。

周密は『雜識』後集の「太學文變」で、南渡以來の太學での文體の變遷を述べたうえで、淳祐四年に徐霖が省元になると、太學の學生は全て性理學を尊び、競って科擧合格をめざしたので、以後、四書・東銘・西銘・大極圖・通書・語錄のみが學ばれるようになった、と記す。朱子學が官學となって以後は文體のうえでも大きな變化があったとするわけである。周密は續けて、このような狀況も咸淳末年になると變り、『莊子』や『列子』の語が用いられるようになり、對策の中に「光景不露」とか「大雅不澆」などという不吉な語が用いられて宋の滅亡を迎えてしまい、これは文妖である、と記している。文體の變化も宋の滅亡を示唆していたということになる。

既に記した沈仲固の言にも、道學者は詩書作文を玩物喪志とし、道學徒は四書以下の道學關係の書物しか讀まないという指摘があったが、このような風潮は周密からすれば批判すべきことで、『雅談』卷上には次のようにある。宋の文治は盛んであったが、諸老は率ね性理を崇んで藝文を卑しみ、朱熹は程頤を主として蘇軾を抑えた。呂祖謙の『皇朝文鑑』での取捨選擇は多くは朱熹の意によっているので遺漏の多いことは極めて惜しむべきだ、と。周密はこのように記したうえで、葉適の、洛學が興って文學は破壞された、[56] という一文を引き、これは至言であるとしている。この一文には文學觀のうえでの蘇學對程學という對立關係を看取しえよう。また『雜識』續集下の「押韻語錄」では劉克莊の一文を引用しており、それは、近世は理學を貴んで詩賦を賤しみ、まま篇詠があったところで率ねは語錄や講義に押韻したものにすぎな

い、[57]というものである。ここには詩賦を賤んだことへの批判がみえるのである。

周密は自らの文學論を開陳しているわけではないので、彼の文學的立場を云々することはできかねるが、右の記述からしてみれば蘇學の系譜をひくといえよう。朱熹は蘇學を否定し、科擧においては詩賦を課すことを廢止せよと論じていたことは周知のことである。[58]このような文學觀が政治上の問題として登場するのは科擧においてであったし、太學での文學のあり方であった。周密の文脈からすれば太學で四書以下の道學關係の書物のみが學ばれるのは批判されるべきことであった。一方、科擧と詩賦の關係について周密は言及しているわけではないが、[59]章良能は禮部貢院の三弊の一つとして詩賦を沮抑することが甚しいことを論じており、[60]章良能の詩賦重視という立場は當然のことながら周密にも受けつがれていたといえよう。

このようにみると、周密の道學批判は文學の面でも批判的であったといえることになり、その底流として蘇學と程學の文學觀の相違を想定することができるのである。

七

小稿は周密の殘した記述のなかから道學に關する批判的な記述を羅列することに終ってしまった。周密の道學批判は體系的なものではなく、朱熹については大儒として十分に認識しており、時に朱熹についての批判もみられるが、[61]それらは朱子學の思想體系をゆるがすほどのものではないし、思辨性のあるものではない。周密の批判は周秘以來のいわば家學によるものであり、韋・楊兩家からの影響もみられる。その重點は政治・經濟面にあっては、對金關係にしても政策面にしても現實と乖離した道學者への批判であり、また彼等の處世への批判であった。一方、文學の面からすれば周密は蘇學の立場にあるといえ、北宋以來の程學と蘇學の對立の系譜をひいているといえよう。宋元交替の動亂の折に、南宋の滅亡を見すえながら周密は著述を殘したのだから、彼の立場からすれば南宋の滅亡の原因を道學に結びつけたのは當然のこと

で、これは清談よりも甚しいという南宋士大夫の病弊を記述したことにもなるわけである。

このような周密の記述は道學の側からみれば反批判すべき、あるいは隠蔽すべきものであり、胡文璧の『野語』後序にみられるようなことがおこるのも、また『學案』が「晩宋詆詈諸儒者」と周密を規定したのも無理からぬところであった。では周密のような存在は宋末元初にあって特異な存在なのであろうか。管見の限りでは周密ほどの批判的な記述を残した人物はいないようではあるが、周密が宋末元初の杭州のいわば文藝サロンの中心人物の一人であったことをみると、[62] 周密のような立場は受けいれられており、周密は當時の文藝界の一部の意見を代表しているとも推測しうるのである。筆者は別稿で道學に批判的な家系であった明州の高氏一族を素描したことがあるが、[63] 周密ならびにその家系や高氏一族のような人々を再評價することは、南宋の様々な思想潮流を究明することとともに、南宋における道學とその實態を考究するうえで必要なことといえよう。

朱子學は確かに淳祐元年の時點で官學という地位を得はしたが、周密から批判されるような一面もあった。ついで元代になると、延祐二年（一三一五）に科擧が再開され、朱熹の四書の解釋が採用されたにしても、元代にあっては金以來の蘇學を引く流れと道學の對立がみられ、[64] 宋代に比べれば元の科擧の存在の意義は小さいといわねばならず、かくみると朱子學が本格的な意味での官學となるには明代を待たねばならなかったのであった。

註

（1）以下の諸論文を參照。
Conrad M. Schirokauer "Chu Hsi's Political Career: A Study in Ambivalence" (A. F. Wright & D. Twitchett ed. "*Confucian Personalities*" Stanford Univ. P. 1962).
John Winthrop Heager "The Intellectual Context of Neo-Confucian Syncretism" *The Journal of Asian Studies* 31—3. 1972. James T. C. Liu "How did a Neo-Confucian school become the state orthodoxy?" *Philosophy East and West* 23—4. 1973. 劉子健「宋末所謂道統的成立」（『文史』六　一九七九、同『兩宋史研究彙編』所收　一九八七）。

（2）研究史として後藤延子「朱子學研究の現狀と課題」（『歴史

學研究』四二一　一九七五）が詳しい。

（3）南宋初期の複雑な動向については近藤一成「南宋初期の王安石評價について」（『東洋史研究』三八―三　一九七九）が詳しい。

（4）前掲 Schirokauer, Liu は淳祐元年に state orthodoxy になったとする。また劉は「國家理念」とも表現している。周寶珠・陳振主編『簡明宋史』（一九八五）は官學になったとする。

（5）『四庫全書總目提要』（以下、『提要』）の『野趣有聲畫』には、楊公遠は元になっても仕えなかったので、周密の例に従って南渡の遺民と稱すべきであるが云々、とある。

（6）明の人、王行の『半軒集』卷一八、「題周草窗畫像卷」には、宋の運は既に徂き、吳に三山の鄭思肖が、杭には弁陽の周密がおり云々、とある。

（7）『提要』の『伯牙琴』には、鄧牧は謝翺・周密らと仲が良く、二人はともに抗節遯迹の人で云々とある。

（8）尙、『野語』『雜識』はともに唐宋史料筆記叢刊本による。

（9）周密の年譜としては「年譜」以外に顧文彬「周公謹年譜」（『過雲樓書畫記』卷二）、沅君「艸窗年譜擬稿」（『北京大學研究所國學門月刊』一―四　一九二七）があり、「年譜」を補うものとしては潘柏澄「夏著『周草窗年譜』訂誤」（『史原』六　一九七五）があり、傳記としては Chu-tsing Li "CHOU MI" (*Sung Biographies* 1976) が要を得ている。尙、小稿の第二節に關しては「年譜」に史料があげられている場合、基本的には史料名をあげないことにする。

（10）たとえば宮崎市定「南宋末の宰相賈似道」（『アジア史研究第二』所收　一九五七）。

（11）『學案』卷九六の「附攻專門之學者」では周秘をあげて、秦州の人で周秩の弟とし、王德毅『宋人傳記資料索引　二』（一九七四）はこれを受け、かつ秦州の人とするがともに誤りである。

（12）『會要』ならびに『續資治通鑑長編』には熙寧六年から元祐五年にかけて周孝恭なる人物が登場するが、小稿でいう周孝恭と同一人かは未詳。

（13）鄭元慶『吳興藏書錄』は『雜識』後集の「大父廉儉」にみえる「移寓天聖佛刹者幾二十年、杜門蕭然」という記述を踏まえて「幾二十年、杜門著述」と記している。

（14）周密の沒年については『疑年錄』を踏まえて至大元年（一三〇八）とする説もあるが、小稿では「年譜」に從う。

（15）周密がかく記したにもかかわらず、周密の沒後、彼が藏した法書名畫はその子孫によって賣られてしまったことが『柳待制文集』卷一八「題江磯圖卷後」にみえる。

（16）「年譜」三五〇・三六九頁參照。

（17）周珌・章良能について同樣のことは『野語』卷三の「誅韓本末」でも記されている。

（18）「年譜」附錄「草窗著述考」參照。

（19）たとえば『野語』卷一四「鍼砭」や同卷一八「章氏玉杯」など。

（20）たとえば小稿でもふれる『野語』卷三の「誅韓本末」。

(21) 『雜識』には各文章の末尾にその話の提供者の名を記す場合がある。たとえば續集上「姨夫眼眶」には「伯機」とあり、この前條の「狗站」は冒頭に「伯機云」とある。伯機とは鮮于樞のことである。

(22) 『野語』卷五「端平入洛」は當時の隨軍幕府の日記によっているし、同卷一八「二張援襄」は襄州順化の老卒から聞いたとする。

(23) たとえば『雜識』別集下の「褚承亮不就試」以下の六條は元好問の『續夷堅志』によるという。

(24) 周密の史料蒐集の様子の一端は『雜鈔』卷一や『舊事』自序にみえる。

(25) たとえば『雜識』別集上「方回」にみられる方回への批判。尙、方回は朱子學徒としても知られる。周密の批判の評價については元代珍本文集彙刊に收められる『桐江集』の昌彼得の「敍錄」に詳しい。

(26) たとえば『雜識』續集下の「張世傑忠死」など。

(27) たとえば『野語』卷一一の「滕茂實」では、國史に滕茂實の本傳はあるが甚だ簡略であるゆえ、北方つまり金の記錄も踏まえてその實を得るとあり、同卷一六「昆命元龜辨證本末」は『四朝聞見錄』甲集「昆命于元龜」の記述が簡略ゆえ詳述するという。

(28) たとえば『雜識』後集の「成均舊規」などの太學關係の記述は南宋の太學を知る好史料であり、『野語』卷一七の「景定行公田」は賈似道の公田法の基本史料である。

(29) たとえば『野語』卷一五の「曲壯閔本末」では、曲端の『四朝國史』本傳論贊を批判するが、『宋史』卷三六九の本傳論贊は『四朝國史』を踏襲したものである。

(30) 前掲註(1)の諸論文など。

(31) 涵芬樓宋元人說部書所收『野語』の夏敬觀の跋文にみえる。

(32) 唐宋史料筆記叢刊本『野語』の點校說明によると、正德刊本は中國にはない模樣だが陸心源舊藏本が靜嘉堂文庫にあり、また同刊本は大倉集古館・尊經閣文庫にも藏されている。

(33) たとえば『越縵堂讀書記』の『雜鈔』の說明。

(34) 『學案補遺』卷九七の「周密」への馮雲濠の案語も、周密が周秘に似ていることを指摘している。

(35) 『提要』の『野語』の解說では、胡文璧が削去しないで出版したことをよく門戶の見を除いたというべきだとし、削去しなかったことに贊成している。同じく『提要』の『雜識』の解說では、『雜識』が宋末の講學の弊に詳しく、小稿で後述する沈仲固や周平原の言ったことは炯戒であって、世道人心に關わることでもあり、『雜識』が小說に分類されるからといって忽せにすることはできないとするなど、紀昀の周密への評價は高い。紀昀は道學を好まず漢學を取ったのでこのような評價が可能であったのだろう。一方、紀昀の『閱微草堂筆記』が道學者を批判していることはよく知られているところである。

(36) 周密が賈似道と親しかったという批判は『陔餘叢考』卷四一の「葉夢得周草窗」などにもみえるが、このような批判のあたらないことは「年譜」德祐元年條に詳しい。

(37) 尙、『國史舊聞』第貳分册には「僞學之禁」「道學與政事」など小稿と關連する記述が多い。

(38) 周秘の沒年については『要錄』卷一五五、紹興十六年十月己未條、ならびに同卷一五六、同十七年十二月癸卯條の兩者にみえ、いずれか決し難い。

(39) このことは『要錄』卷一二三、紹興八年十一月丁未條や『宋史』卷三七四、胡銓傳にみえる。

(40) この兩書について筆者などは共に未詳。

(41) この事件については『要錄』卷一六一、紹興二十年三月壬寅條、『宋史』卷四三五、胡寅傳にみえ、章夏を『要錄』は章廈とし、『宋史』は章复とする。

(42) 周學武『唐說齋研究』（一九七三）、拙稿「唐仲友覺書」（『社會文化史學』一二　一九七五）、朱瑞熙「宋代理學家唐仲友」（『劉子健博士頌壽紀念宋史研究論集』所收、一九八九）參照。

(43) 尙、開禧用兵については衣川強「「開禧用兵」をめぐって」（『東洋史研究』三六―三　一九七七）に詳しい。

(44) 『宋史』本紀、嘉泰四年九月壬午條、ならびに『宋史紀事本末』卷八三「北伐更盟」にみえる。

(45) 同樣の見方は『鶴林玉露』甲編卷四「鄧友龍使虜」にみえる。

(46) 鄧友龍が張栻に學んだことは『學案補遺』卷七一に見えるが、これは『湖南通志』（嘉慶卷一二七、光緒卷一六二）によったものであり、『湖南通志』は『野語』と『鶴林玉露』によっている。

(47) この人事については『會要』職官・降黜、嘉泰二年閏十二月二十八日條にみえる。

(48) 同樣の記述は『鶴林玉露』丙編卷三「聖賢豪傑」や『貴耳集』卷下にもみえる。

(49) 沈仲固は『學案補遺』卷九七にあげられているが、これは『雜識』の記述によっている。

(50) 饒魯は黃榦の弟子であり、その學派は『學案』卷八三に雙峰學案としてまとめられている。

(51) 乾隆『廬陵縣志』卷二八や羅洪先「族祖權院府君傳」（『潤谷遺集』所收）など。

(52) この一文は『後村先生大全集』卷一〇〇「唐察院判案」によっている。

(53) 陳東原『國史舊聞』第貳分册第四三二條「宋儒淸談」參照。

(54) この記述は周密の誤りであろう。『宋史』卷四一六、陳宜中の傳によると、寶祐四年、丁大全を攻擊した陳宜中ら六人が六君子とされる。

(55) 「叩頭」の原文は「搭頭」である。「搭頭」の他の用例を知らないが、叩頭の意とした。

(56) 筆者の檢索の不備か、これと同じ文章を見出してはいないが、葉適は同じ趣旨を『水心先生外集』卷一三「宏詞」などにも記している。一方、『習學記言序目』卷四七、「皇朝文鑑　一　周必大序」には「程氏兄弟發明道學、從者十八九、文字遂復淪壞」とあるので、この一文によっているのかもしれない。尙、原文の「文字」は文學と解釋した。

(57) この一文は『後村先生大全集』巻一一一「恕齋詩存叢」にみえる。

(58) 『朱子語類』巻一三九第一〇六條、『朱文公文集』巻六九「學校貢舉私議」參照。

(59) 尙、既にふれた『雜識』別集下の「空談實效」に引く周平原の言では科擧と詩賦・經義の關係にふれている。

(60) 『會要』選擧・貢擧雜錄五、嘉泰元年十二月十八日條には臣僚の言としてみえるが、『宋史』巻一五六「選擧志 二」や『文獻通考』巻三二「選擧考 五」によって章良能の言とわかる。

(61) 周密の朱熹の學問への批判は『雜識』後集の「朱王二事相同」、『野語』巻一三の「綱目疑誤」、『雜鈔』巻一などにみえる。

(62) 周密の交遊については「年譜」、沅君「艸窗朋輩考」(『北京大學研究所國學門月刊』一―四 一九二七)參照。

(63) 拙稿「南宋明州の高氏一族について」(『宋代の社會と宗教』所收 一九八五)。

(64) W. Theodore de Bary 粕山明抄譯「元代における道學の興隆」(『東洋史研究』三八―三 一九七九)參照。

〔附記〕小稿は平成二年度科學研究費(總合研究(A))「宋より明清に至る科學・官僚制とその社會的基盤の研究」による研究成果の一部である。

ZHOU MI 周密 AND NEO-CONFUCIAN ORTHODOXY (DAOXUE 道學)

ISHIDA Hajime

Zhou Mi 周密, who lived in the transition period from Song 宋 to Yuan 元 and was the author of the *Qidongyeyu* 齊東野語, the *Guixinzashi* 癸辛雜識, and so on, took consistently a critical attitude toward The Neo-Confusian Orthodoxy (Daoxue 道學) of Southern Song 南宋 in his writings, relying on his library and family learning both handed down to him from his great-grandfather, Zhou Mi 周祕, and under the influence of his relatives, the Zhangs 章氏 and the Yangs 楊氏. The Orthodox loathed Zhou Mi and tried to conceal his arguments. The main points of Zhou's criticism were the unrealistic scholarship of the Orthodox and their way of life. In the literary aspect, Zhou Mi belonged to the Suxue 蘇學. It was natural that Zhou Mi, having witnessed the revolution from Song to Yuan, connected the decline of Southern Song with the superficial and conservative Orthodox. We can assume that Zhou's criticism was representative of the opinion held by some in his contemporary literary world. In order to place the Zhuzixue 朱子學 adequately in the history of Southern Song, it is necessary to analyse the anti-Orthodox thinkers like Zhou Mi as well as to examine various tides of ideas of Southern Song.

THE PROBLEM OF FOOD IN WESTERN ZHEJIANG PROVINCE DURING THE MIDDLE OF THE QING PERIOD

NORIMATSU Akifumi

From the 16th century, 3 prefectures of Western Zhejiang 浙江 province —Hangzhou 杭州, Jiaxing 嘉興 and Huzhou 湖州, namely Zhexi 浙西—